

奈良県地域包括ケアシステム構築モデル事業

地域で暮らし続けるための仕組みづくり

五條市おおとう元気会議の取り組み

報 告 書

平成26年3月

おおとう元気会議

# 目 次

はじめに	1
1 取り組みの経緯	3
2 生活実態把握調査	13
3 おおとう元気会議参加団体による取り組み	31
4 山古志視察とシンポジウムの開催	39
5 地区懇談会	53
6 大塔における地域包括ケアシステムの構築に向けて	57

## はじめに

我が国では、諸外国に例をみないスピードで高齢化が進行しており、65歳以上の人口は、現在3,000万人を超え（国民の約4人に1人）、平成54年（2042年）の約3,900万人でピークを迎え、その後も、75歳以上の人口割合は増加し続けることが予想されています。

奈良県においては、65歳以上の人口は、平成24年（2012年）に35万1千人、高齢化率は24.9%（県民の4人に1人が高齢者）となっています。今後、高齢化率は、平成27年（2015年）には28.7%、平成37年（2025年）には33.2%へと上昇し、県民の3人に1人が高齢者になると推計されています。

団塊の世代が75歳以上となる平成37年（2025年）以降は、全国的に医療や介護の需要がさらに増加することが見込まれています。このような中、平成37年（2025年）を目途に、「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援という理念のもとで、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を推進する」という方針が厚生労働省から示されています。

この地域包括ケアシステムは、おおむね30分以内に必要なサービスが提供される日常生活圏域を単位として構築することが想定されており、都市部や山間地など、地域の特性や状況に応じて、地域の自主性や主体性に基づき市町村が作り上げていくことが求められています。このような中、奈良県においても、市町村の取り組みを様々な形で支援するなど、地域包括ケアシステムの構築に向けた取り組みを推進しているところです。

特に、台風12号に起因する紀伊半島大水害で平成23年9月に被災した五條市大塔町については、早期の復旧・復興を図るという観点からも地域包括ケアシステムの姿を早急に検討していく必要があり、県では、復旧・復興計画推進会議の重点テーマ「福祉の充実」に位置づけ、地域で暮らし続けるための仕組みづくり事業（奈良県地域包括ケアシステム構築モデル事業）として、五條市地域包括支援センターの取り組みを支援しているところです。

この報告書は、平成24年度から進めてきたこれまでの取り組みの経緯及び成果をとりまとめたものです。おおとう元気会議メンバー、地域の人々と共にこれまでの取り組みを振り返り、共有することにより、今後の活動のさらなる発展につなげていきたいと考えています。

また、この事業は、五條市地域包括支援センターがコーディネート役を果たし、住民や民間事業者、関係機関との協力関係を築きながら、山間地の実情に応じた地域包括ケアシステムの構築を進めているところに特徴があります。この報告書が一助となり、県内各市町村における地域包括ケアシステム構築に向けた取り組みが発展していくことを期待しています。

平成26年3月

奈良県健康福祉部長寿社会課



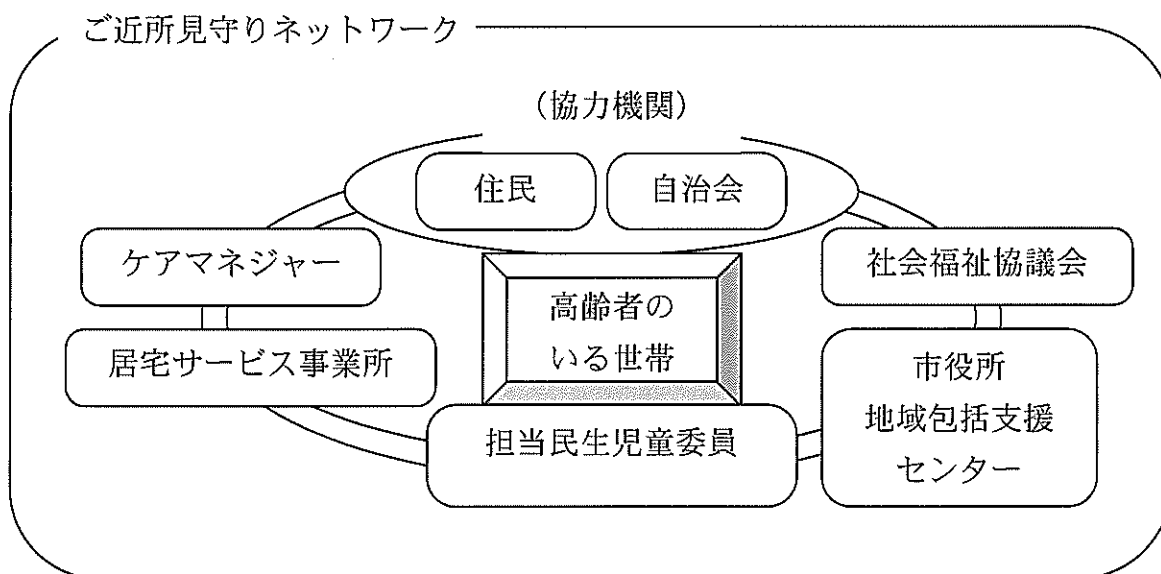
# 1 取り組みの経緯

## 五條市地域包括支援センター

平成23年9月、台風12号の影響により五條市大塔町では、死亡者が出るほどの大きな被害に遭った。すでに65歳以上の高齢者が半数以上の大塔地域にとって、福祉サービスの拠点であった大塔デイサービスセンターも使用不能の状況になり、多くの住民が仮設住宅や子ども達の家に移り住むなど、人々の生活環境は変化してきた。

そのよう姿を見ながら災害以降、今まで以上に地域包括支援センターは何ができるだろうと考えていたところ、

- ①奈良県長寿社会課より「災害にあった市村が集まり意見交換をしないか」との働きかけがあり、1市3村(五條市・十津川村・野迫川村・天川村)が集まり意見交換会を実施した。そこで五條市からは大塔町における「ご近所見守りネットワークの構築と生活支援」について提案した。このことがきっかけとなり、地域包括ケアシステム構築モデル事業として、奈良県長寿社会課(高齢者地域生活支援係)の支援を得ることとなった。



- ② 仮設住宅での生活がはじまり半年が過ぎた頃、奈良県立大学地域創造学部の学生による仮設住宅での支援活動の話があり、古山准教授と出会うことができた。

- ③ 五條市と市内の郵便局との連携を協議する場が設けられ、「ご近所見守りネットワーク」への協力を提案した。(平成25年3月19日、五條市と五條市内郵便局との相互連携協定書が調印された。)

これら①～③の出来事がうまく重なり合い、中山間地域の地域包括ケアシステム構築モデル事業として“地域で暮らし続けるための仕組みづくり”を検討する「おおとう元気会議」の取り組みがスタートすることとなった。

当初は、地域検討会という仮称ではじまった。検討会には、奈良県立大学地域創造学部の古山周太郎准教授にアドバイザーとして関わっていただくとともに、日頃の地域活動も踏まえて、是非関わっていただきたいと思う方々・機関に参加を依頼し、平成24年10月に第1回検討会を開催した。

第1回検討会終了後、大塔地域および仮設住宅在住の40歳以上の方を対象に「生活実態把握調査」を訪問にて実施した。五條市地域包括支援センターでは、復興事業に役立ててほしいという思いから、この調査内容の一部を庁内LANに掲載したところ、「地域住民と顔の見える関係づくりをしたい。」と考えていた五條市消防署大塔分署から問い合わせがあった。チャンスだと思い、検討会への参加を働きかけたところ、平成25年度から参加していただけることとなった。

平成25年度より「地域検討会」から「おおとう元気会議」へと名称を変更し、不定期ではあるが3～4ヶ月に1度開催している。検討内容に応じて、その都度必要な関係者に加わっていただくように働きかけ、運営している。

#### おおとう元気会議参加団体

地域の代表	民間事業者等	公共機関
大塔地区自治連合会	(財)大塔ふる里センター	五條市大塔支所
大塔地区民生児童委員協議会	五條市内郵便局代表 坂合部郵便局長	五條市保健福祉センター
		五條市立大塔診療所
大塔福祉ふれあいの会	五條市五條郵便局長	五條市消防署大塔分署
	五條市辻堂郵便局長	五條市介護福祉課
	五條市阪本郵便局長	西吉野・大塔在宅介護支援センター
	五條市社会福祉協議会	五條市地域包括支援センター
		奈良県立大学古山准教授
		奈良県吉野保健所
		奈良県長寿社会課

おおとう元気会議開催等の状況

平成 24年度	開催日	内 容
第1回	平成24年10月25日(木)	・趣旨説明 ・意見交換 ・アンケート調査実施について
第2回	平成25年2月28日(木)	・調査結果の説明 ・居場所づくり、生活支援について 意見交換
視察調査	平成25年3月18日(月) ～3月19日(火)	視察先：新潟県長岡市山古志 (旧山古志村)
平成 25年度		
第1回	平成25年4月26日(金)	・旧山古志村視察の報告 ・動き始めたご近所見守り活動について
第2回	平成25年9月2日(月)	・防災について意見交換 ・関係機関の活動報告
第3回	平成25年11月3日(日)	地域で暮らし続けるための仕組みづくりシンポジウム おおとう元気会議みんなで話そう会 ・基調講演 ・パネルディスカッション (大塔いきいき文化祭において)

# おおとう元気会議通信(創刊号)

災害から約1年半、大塔町の人々の生活が変わる中「この五條市大塔町で住んでいてよかった」と思える地域にするためには、どのようにしたらいいのか？

五條市地域包括支援センターは、関係機関と連携し地域の方々と共に「地域で暮らし続けるための仕組みづくり」を考え実行するために、昨年10月仮称「地域検討会」を開催、今年4月からは「おおとう元気会議」と名づけ仕組みづくりを進めることになりました。

## 【第一弾】ご近所見守りの仕組み

### (^\_^)大塔福祉ふれあいの会の活動

普段の生活の中で、身近な方をさりげなく見守り！



### (^\_^)郵便局の活動

“あいさつ運動” 配達員の方が「おはようございます」「こんにちは」などのお声かけ！ 外交員の方が、訪問時にちょっぴりお話相手に…

### (^\_^)消防署（大塔分署）の活動

“地域の方々と顔見知りの関係づくり” 平成25年度中に全世帯を対象に「防火防災訪問」を行う予定です。

例えば、住宅火災警報器の設置状況や救急キットの確認などをさせていただきます。

### (^\_^)財団法人 大塔ふる里センターの活動

お買い物支援「まわるくん」をご利用のお宅を、配達時に見守り！

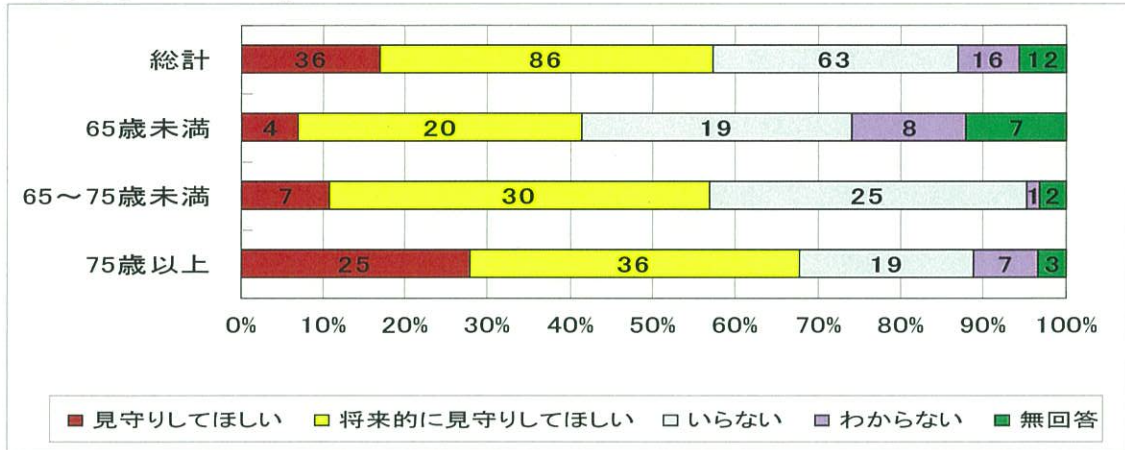
～ご協力ありがとうございました～



昨年11月から12月にアンケート調査のため訪問させていただきました。町民の皆さまには、快く受け入れていただき暮らし続けるための悩みや困りごとなどを聞かせていただくことができました。ありがとうございました。

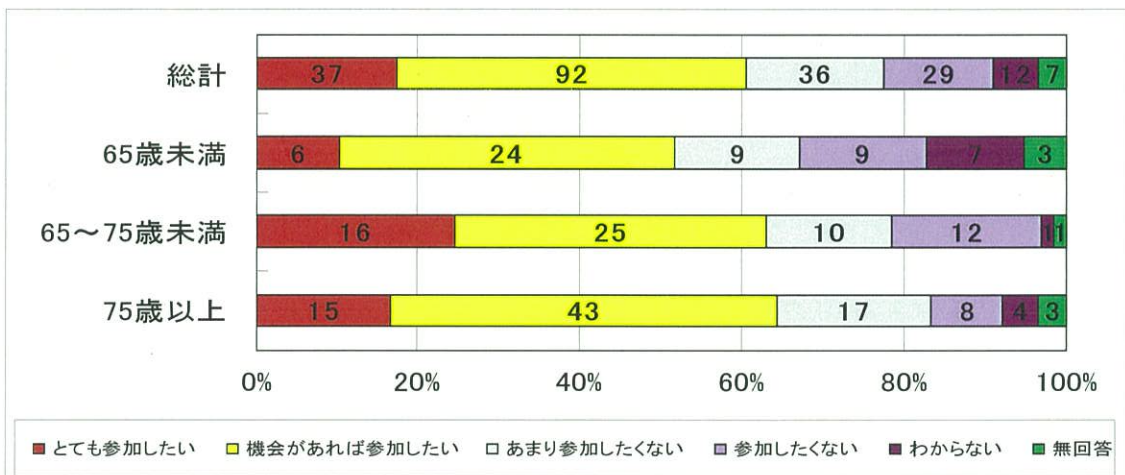
## 「大塔町生活アンケートの結果」から わかったこと Part1

### 《見守りについて》



半数以上の方が「見守りしてほしい」「将来的に見守りしてほしい」と思われています。特に75歳以上の方は、7割近くの方がそのように思われています。

### 《住民同士の交流の機会について》



住民同士の交流の機会には、約6割の方が参加したいと思われています。

【ご意見・お問合せ】 五條市地域包括支援センター  
TEL 22-4001 (内線309) または25-2640 (直通)

# おおとう元気会議通信(第2号)

前回「創刊号」では、ご近所見守りの仕組みについて掲載させていただきました。みなさんお読みいただけましたか？

大塔町で安心して生活をしていただくために、郵便局・消防署・行政などが協力し合って「ご近所見守りの仕組み」に取り組んでいます。



## 【第二弾】生活支援の仕組みづくり

町内に商店がなくなり、お買い物に不自由されている方も多いのでは？ そんな不便さを少しでも解消していただくための仕組みを現在検討しています。

(^\_^)お買い物支援(^\_^)



(財)大塔ふる里センターの見守り活動“まわるくん”

この“まわるくん”は、注文された品物をお宅までお届けする買い物支援サービスでもあります。ふれあい交流館内“村のコンビニ”と併せて是非ご利用ください。



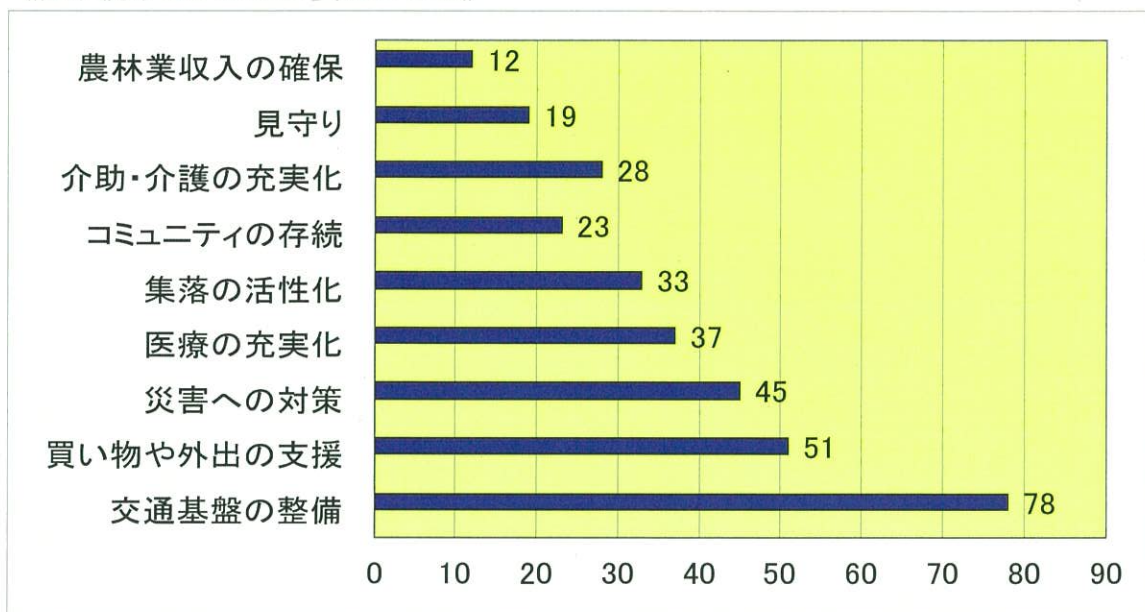
## 買い物バスツアーを企画中

大塔支所では、イオンなどでお買い物をしていただけるバスツアーを現在企画しています。詳しい内容が決まりましたら、回覧文等でお知らせします。ご期待ください！！

また、NPO 法人大和社中が五條市老人憩の家の協力のもと、お買い物ツアー事業を企画されています。詳しくは、NPO 法人大和社中 ☎ 26-6677

# 「大塔野生活アンケートの結果」から わかったこと Part2

《住み続けるために必要なことは》



住み続けるためには、交通基盤の整備が1番必要とみなさん思われています。



## 平成 25 年度第 1 回おおとう元気会議報告

- 見守りがどのように行われるのか、行われているのかの確認。
- 新たな見守り活動「配食」の取り組みや、お買い物支援ができないか？
- 引土・飛養曾地区の畑仕事のボランティア活動(奈良県立大学の学生さん3名と先生1名が5月18日にボランティア活動をしてくださいました。)

次回「おおとう元気会議」は、6月26日(水)午後2時～大塔支所会議室で開催予定です。この会議の傍聴は自由ですので希望されます方は、下記までご連絡ください。(会場については、変更する場合があります。)

こんな事を話し合いました。

【ご意見・お問合せ】五條市地域包括支援センター

TEL 22-4001 (内線309) または25-2630 (直通)

# おおとう元気会議通信(第3号)

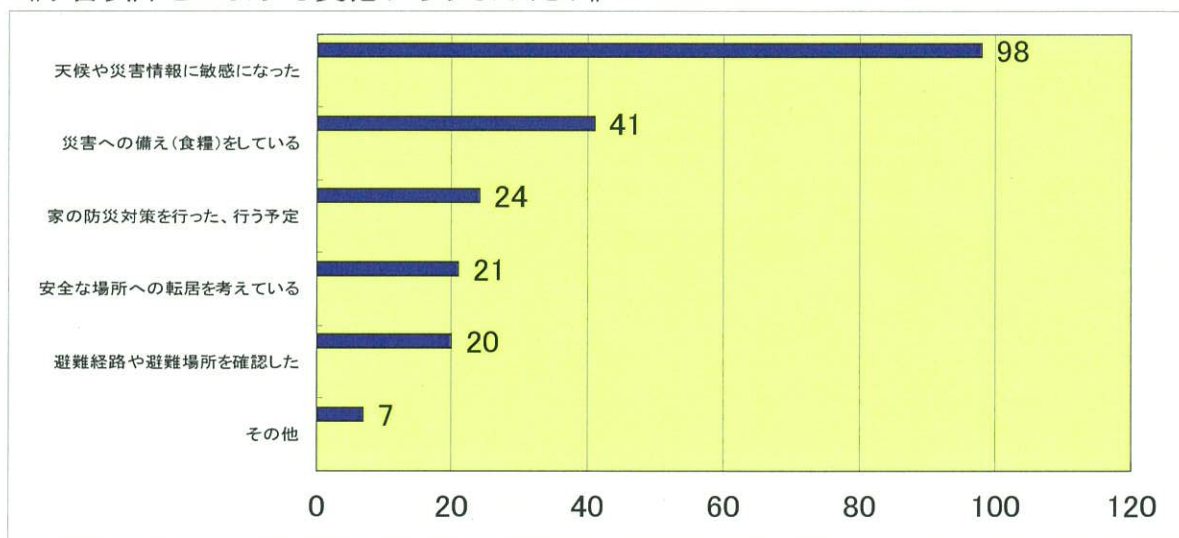
「第3号」では、防災対策について話し合ったことを掲載します。

みなさん、一昨年（2017年）の紀伊半島大水害以降ご家庭の防災対策をどのようにしていますか？ また、ご家族と話し合われた事がありますか？！

## 「大塔町生活アンケートの結果」から わかったこと Part①



《水害以降どのような変化がありましたか》



【水害以降の意識変化「天候や災害情報に敏感になった」と、答える人が多くおられました。】

会議では、自主避難のタイミングや避難場所までの道路への不安など、いろいろな意見が聞かれました。

そこで、自主防災を高めていただくためにも、地域の方々と地震・風水害対策について、語り合う場が必要なのでは？と、思っています。

今後、各大字集会所等で「おおとう元気会議 地区懇談会」の開催を計画したいと考えています。内容が決定しだいお知らせしますので、是非ご参加ください。



# 大塔いきいき文化祭に来てください



## 地域で暮らし続けるための仕組みづくりシンポジウム開催

### ～おおとう元気会議 みんなで話そう会～

第17回大塔いきいき文化祭においてシンポジウムを開催します。  
ひとりでも多くの方に「おおとう元気会議」を知ってもらい、これからの大塔町での暮らしを一緒に考えませんか。

◆平成25年11月3日(土) 午前9:00開会  
午前9:15から午前10:45  
ふれあい交流館「夢の湯」

#### ◆基調講演

山古志における新潟中越地震からの復興

ー新しい地域づくり・新しい日常の獲得ー

講演者 (公財)山の暮らし再生機構 長岡地域復興支援センター  
山古志サライト 地域復興支援員 井上 洋 氏

#### ◆パネルディスカッション

進行 奈良県立大学地域創造学部 准教授 古山 周太郎 氏

パ 初対 おおとう元気会議メンバー

・辻堂郵便局	局長	吉川 季公子 氏
・(財)大塔ふる里センター	ふるさと復興協力隊	東 宣秀 氏
・五條市消防署大塔分署	消防士長	小西 真揮 氏
・五條市地域包括支援センター	係長	井筒 由佳理 氏
・長岡地域復興支援センター	地域復興支援員	井上 洋 氏

これからの暮らしのこと、みんなで知恵を出し合いましょう！！

【ご意見・お問合せ】五條市地域包括支援センター

TEL 22-4001 (内線309) または25-2630 (直通)



## 2 生活実態把握調査

奈良県立大学地域創造学部 准教授 古山周太郎

### 1. 調査の目的と概要

項目	詳細
■調査目的	紀伊半島大水害により被災した五條市大塔町の住民の、暮らしの現状とニーズを把握し、今後の地域包括ケアシステムの構築にむけた重要な参考資料とする。
■調査期間	2012年11月～12月
■対象者	40歳以上の五條市大塔町在住の全住民(五條市岡口仮設住宅、天辻仮設住宅の住民も含む)
■方法	訪問員による戸別訪問調査(不在の場合は置きとめで、後日回収または郵送回収)

#### ・アンケート回収状況

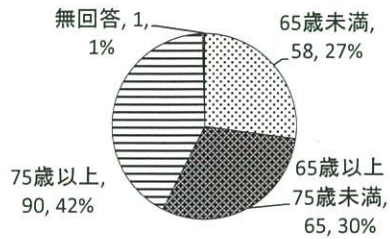
対象人数	配布数	回収数	配布回収率	対象回収率	うち仮設配布数	仮設回収数
265	235	214	91%	81%	59	56

#### ・調査項目（一部本報告書内には未掲載）

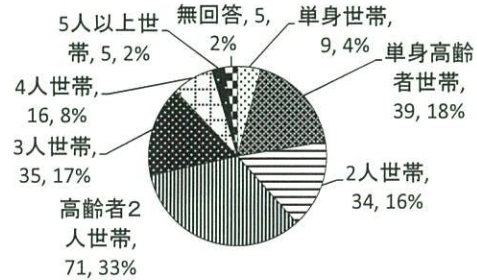
項目	詳細
①フェースデータ	・年齢、性別 ・世帯構成 ・収入の有無 ・経済状況 ・介護の状況 ・帰宅頻度
②日常生活と外出	・日中の活動 ・買い物や通院の頻度、場所、手段 ・外出への意識 ・趣味や親族訪問の場所と頻度
③住民の交流	・集落の集まりの内容と頻度 ・仮設での集会所の利用 ・交流の場への参加ニーズ
④近所づきあいと見守り	・自宅を訪問する人の有無と頻度 ・近所との関係 ・話相手の必要 ・生活の困りごとと頼める相手 ・見守りの必要性の有無 ・見守りをする人と程度
⑤災害対策と意識	・災害への不安 ・緊急対応する人 ・避難場所までの交通手段 ・避難の段階 ・災害対策や避難対策への要望
⑥今後の暮らし方	・暮らし方の変化とその内容 ・防災意識の変化とその内容 ・居住継続の意識 ・住宅再建の状況 ・住み続けるために必要な対策
⑦心身の状態	・持病の有無と病名 ・通院している医療機関 ・心の状態 ・もの忘れの状況 ・活動の判断 ・考えの伝達

## 2. 対象者の状況

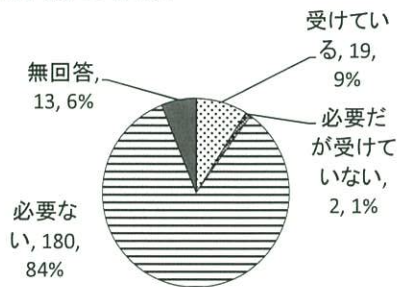
### ■ 年齢



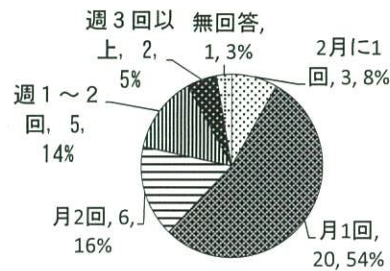
### ■ 世帯人数



### ■ 介護の状況

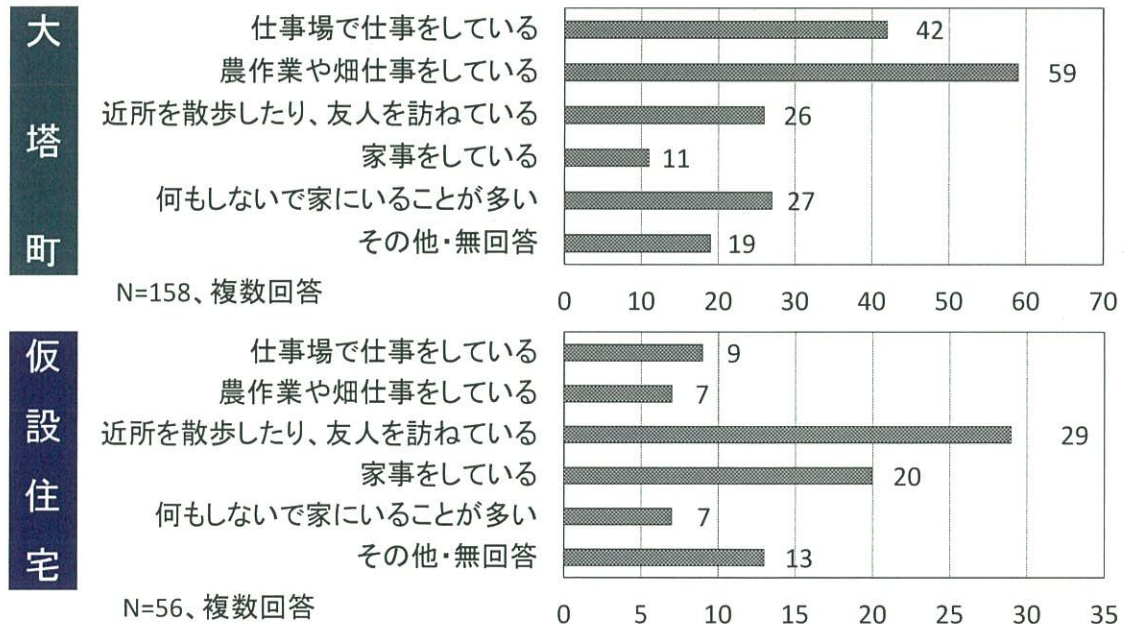


### ■ 帰村状況(仮設住民のみ)



## 3. 日常生活の状況

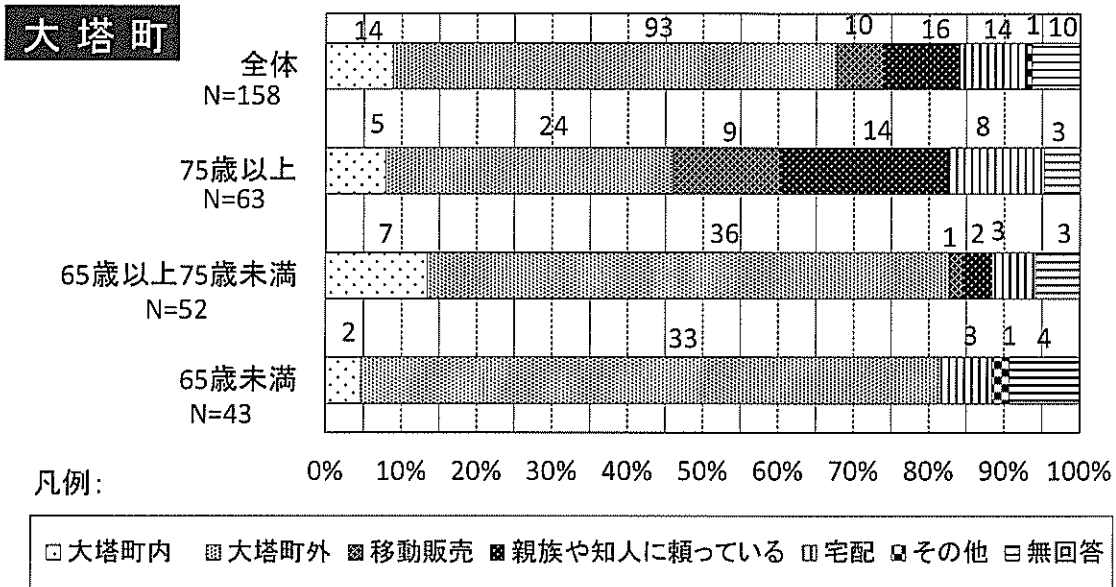
### ・ 日中の主な活動



⇒仮設住宅では日中の活動で仕事や農作業をする人が少ない。

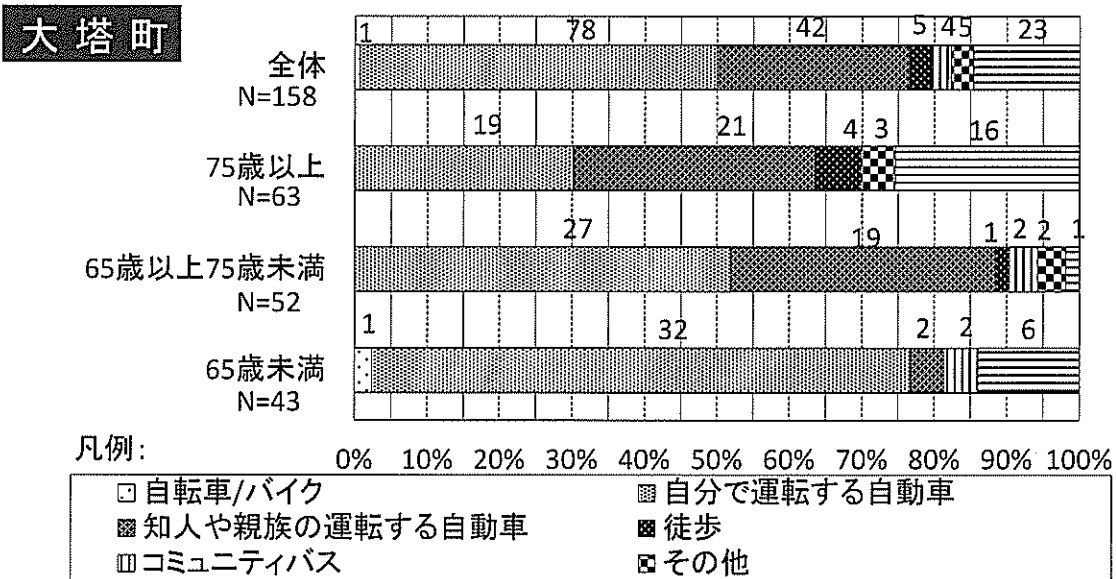


・買物の場所



⇒75歳以上の人は、“移動販売”や“宅配”など自分で買い物しない人が半数近くいる。

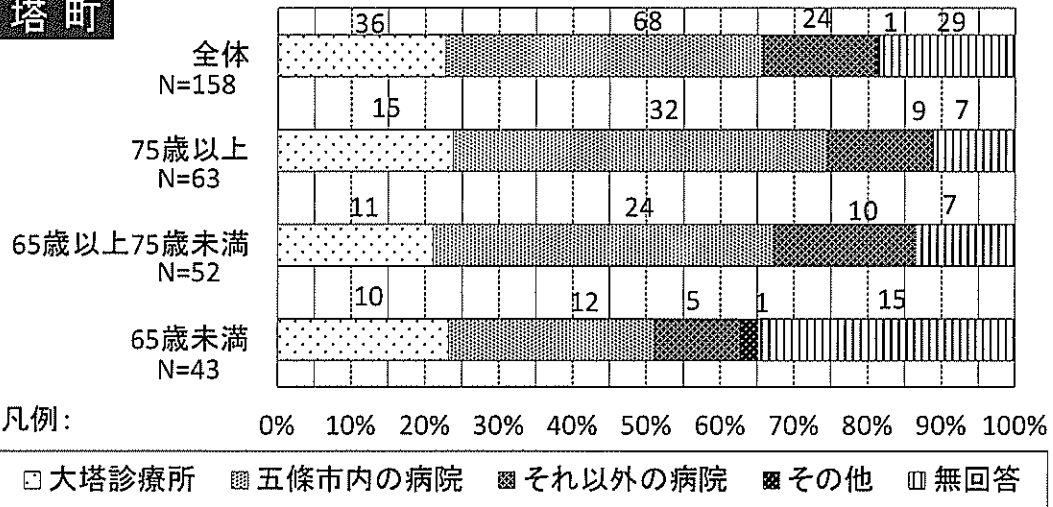
・買い物の手段



⇒年齢が上がるにつれて、自分で運転する自動車の割合が少なくなる。コミュニティバスの利用は買い物ではあまり見られない。

・通院の場所

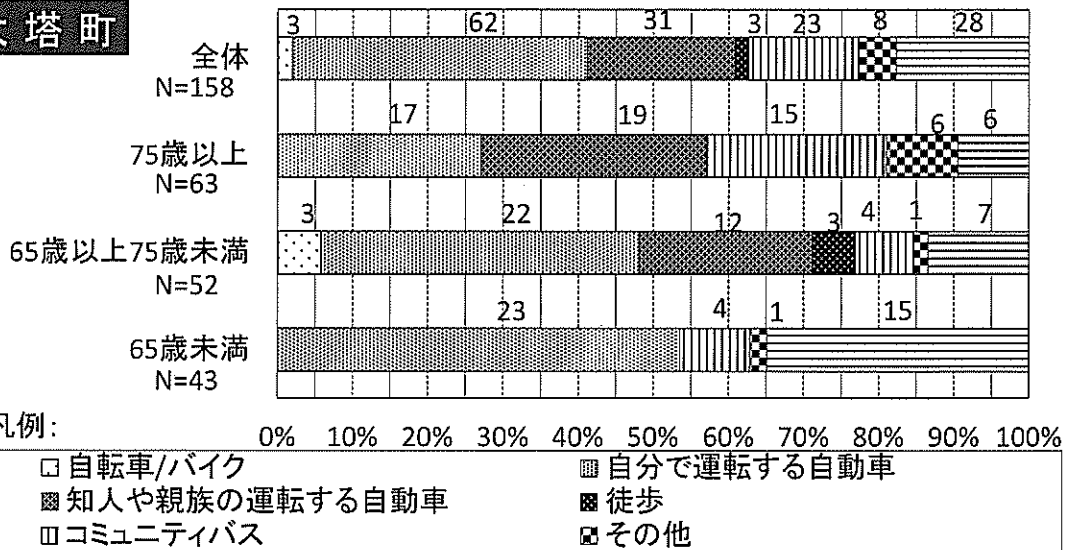
**大塔町**



⇒年齢が上がるにつれて、五條市内の病院への通院が増えていく。一定の割合で大塔診療所に通院している人はいる。

・通院の手段

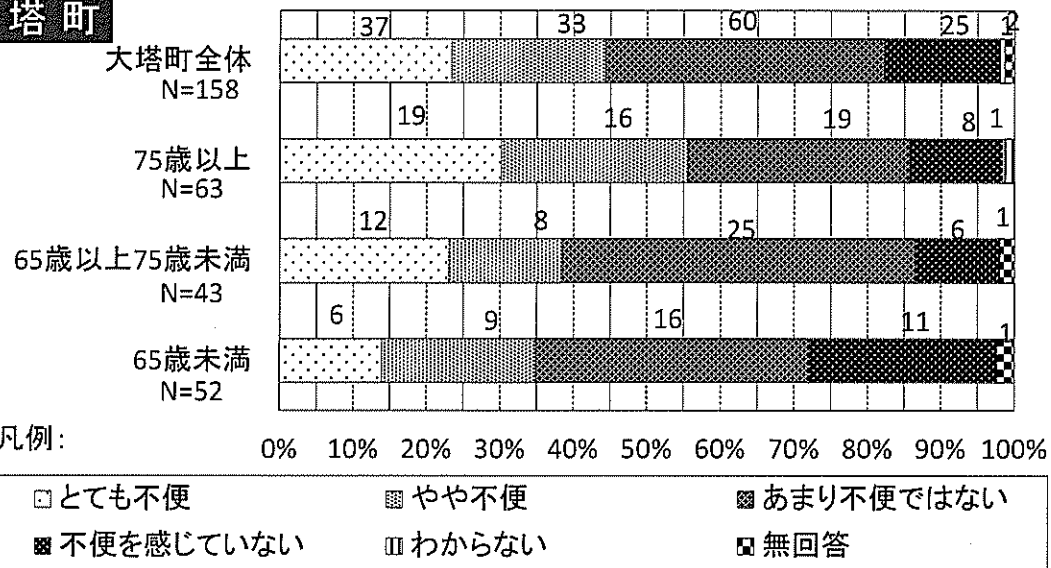
**大塔町**



⇒75歳以上になると、自分で運転する自動車の割合が著しく下がる。コミュニティバスの利用は一定程度見られる。

・外出への意識

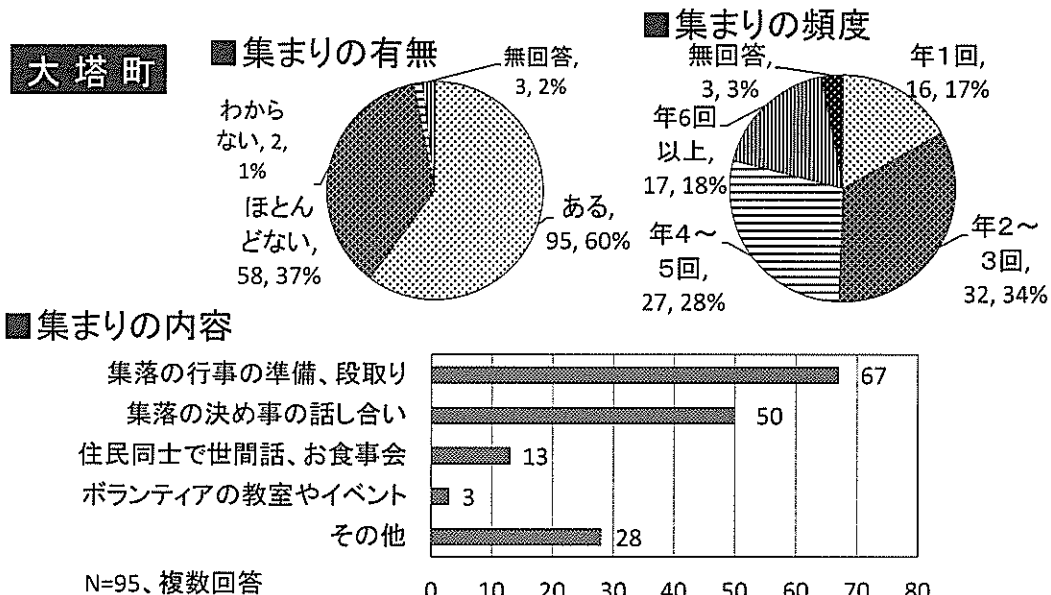
**大塔町**



⇒年齢が上がるにつれて“やや不便”と“とても不便”の割合は上がるが、全体的には不便を感じているのは半数以下である。

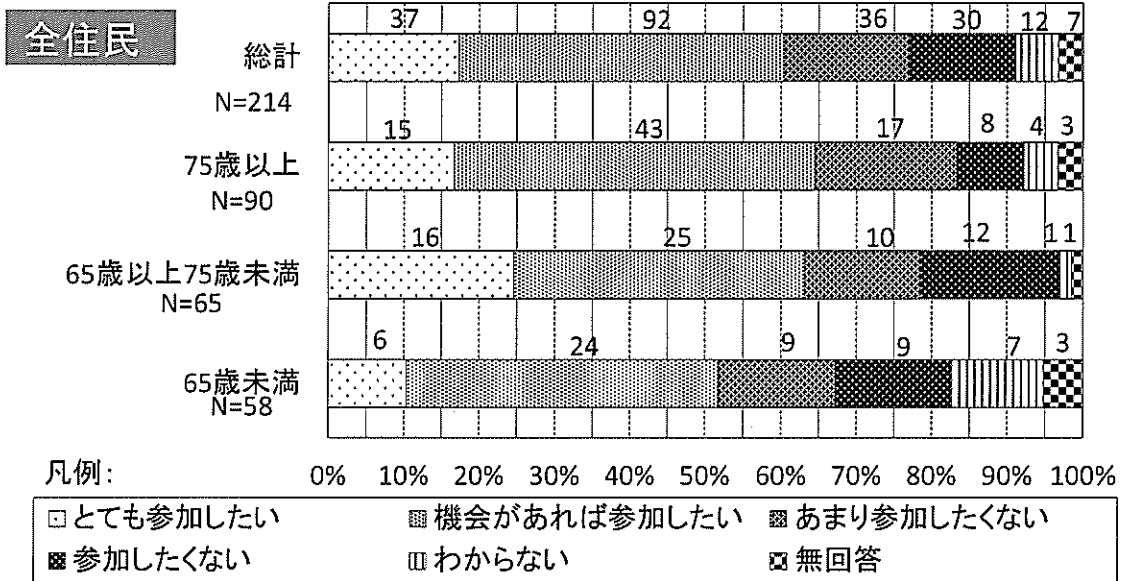
4. 住民の交流

・集落の集まり



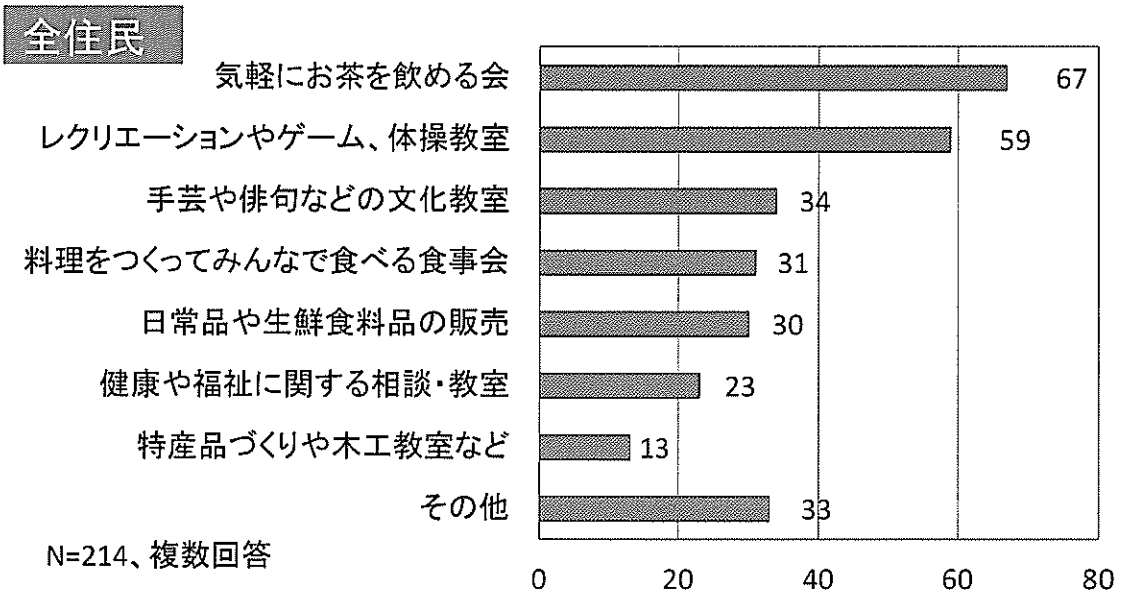
⇒集落の集まりがあると答えたのは60%で、頻度は年1～3回で半数であった。

・交流機会のニーズ



⇒住民の交流機会への参加希望は全体の6割程度であり、年齢が高い方が若干参加希望への割合が高い。

・交流機会に求めるもの



⇒“気軽にお茶を飲める会”や“レクリエーション”、“教室”などの参加しやすい集い方を希望する人が多い。

・交流についての自由意見

交流するのが楽しい、賑やか(17)

人の集まるところに行くのは好きだから。  
みんなと交流して気晴らしがしたいから。(2)  
楽しい気分になれるので。(8)  
近所で集まってご飯を食べる場があれば、交流になるし、周りの人達の情報も分かる。

人に会うため(8)

知った人たちに会えるのが良い。  
みんなが元気であるか、知りたい、話したい。  
一人になって人恋しいため交流したい。  
人間関係が希薄になってきているから。

交流は大切、必要なので(9)

地域の人同士のつながりが大切。(3)  
地域生活上、いろいろな人との交流は必要だと考えている。(2)  
住民同士で参加交流していなくては地区が成り立たない。

外出する機会なので(4)

外にこなければ、話ができない。  
家にずっといるのはイヤ。  
年をとって出不精なので。知人と一緒なら行きやすい。

話しをしたい(26)

話が好き。ポケ防止のため。冬場に外に出れないとどうしようと思う。  
出会ったら世間話や、体のこととか、趣味の話をする。  
顔を見て話をしたら元気が出る。  
皆が集える場所があれば参加したい。お話がしたい。  
人と話するのが好きなので、集まる機会があれば参加したい。

内容が興味あれば(5)

自分の好みに合うことであれば。  
文化教室には参加したい。  
体調管理が出来るような場所であれば。  
ゲートボールだったら参加したい。

条件があれば(11)

忙しいので、時間があれば。(3)  
足の調子が良いときには行きたい。  
車がないので場所による。バスも不便。

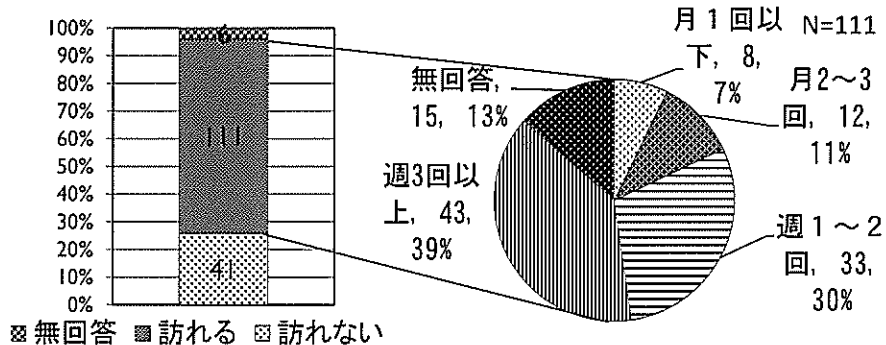
情報交換や情報をえる場(6)

色々なことがわからないから。  
世間のことがわかるので。  
いろいろな情報が得られる。  
色々なことを学びたいから。

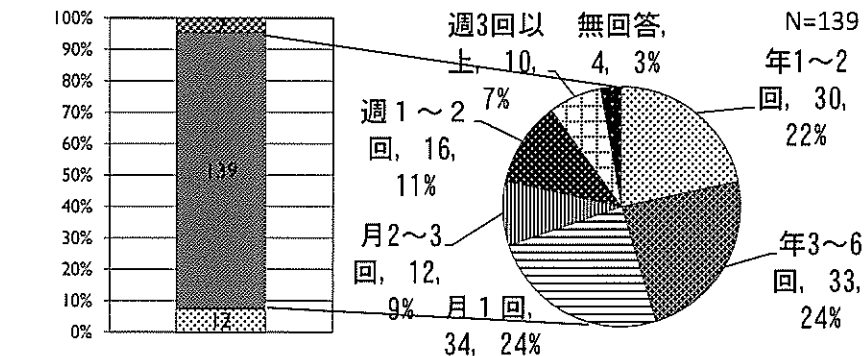
5. 近所づきあい

・自宅を訪れる人と頻度

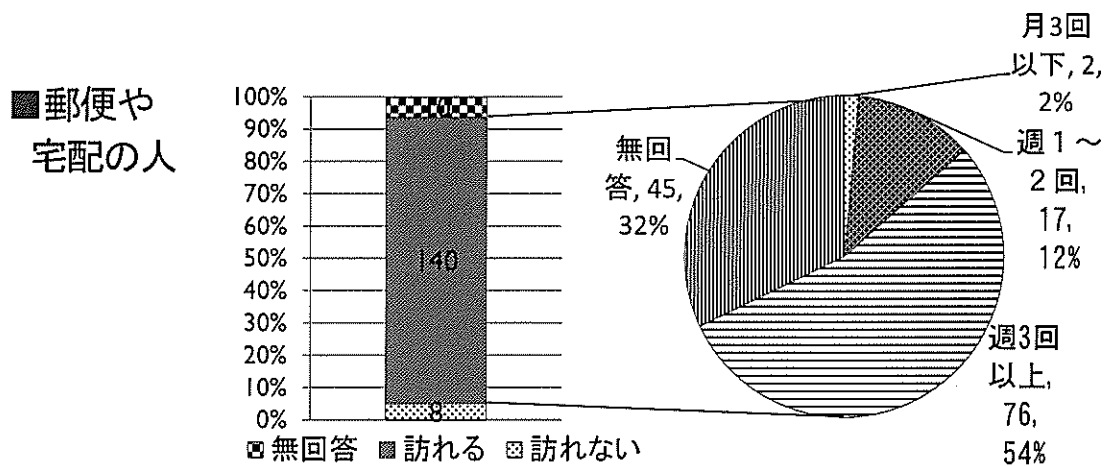
■近所の人



■親族

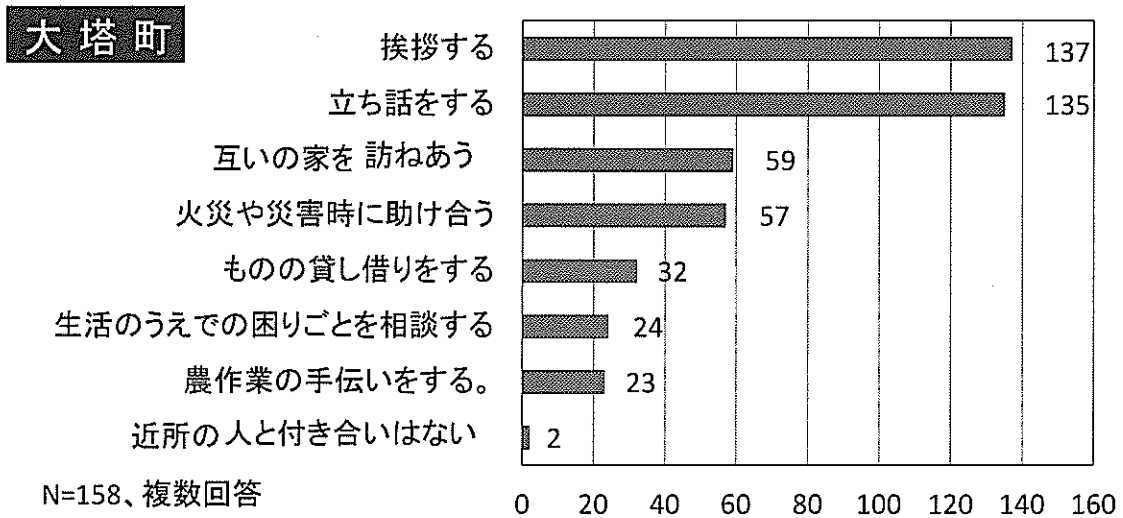


大塔町



⇒近所の人や友人は頻繁に訪れており、親族も月1回以上訪れる人も半数いる。また郵便局の人も半数の人が“週3回以上”と回答している。

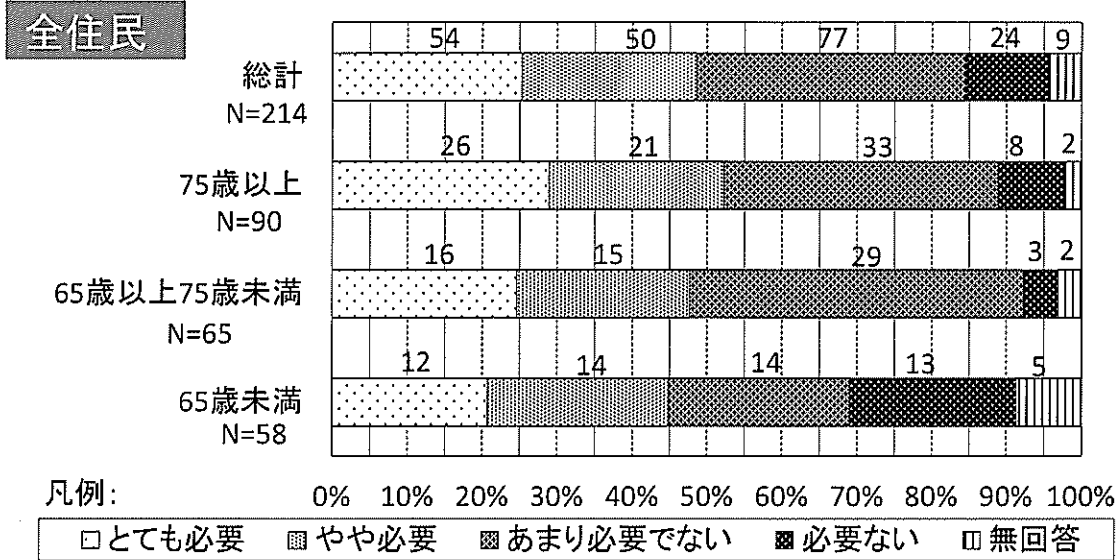
・近所の人との関係



⇒近所の人とはほとんどの人が“挨拶”や“立ち話”をしているが、“家を訪ねあう”関係は三分の一程度である。

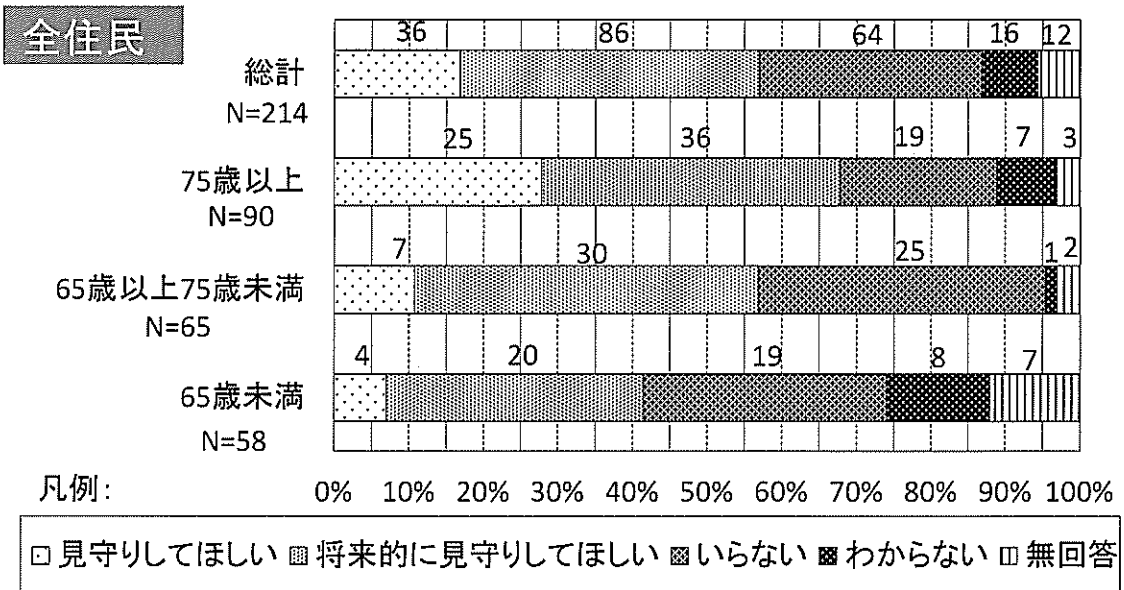
## 6. 見守り支援について

### ・話し相手の必要性



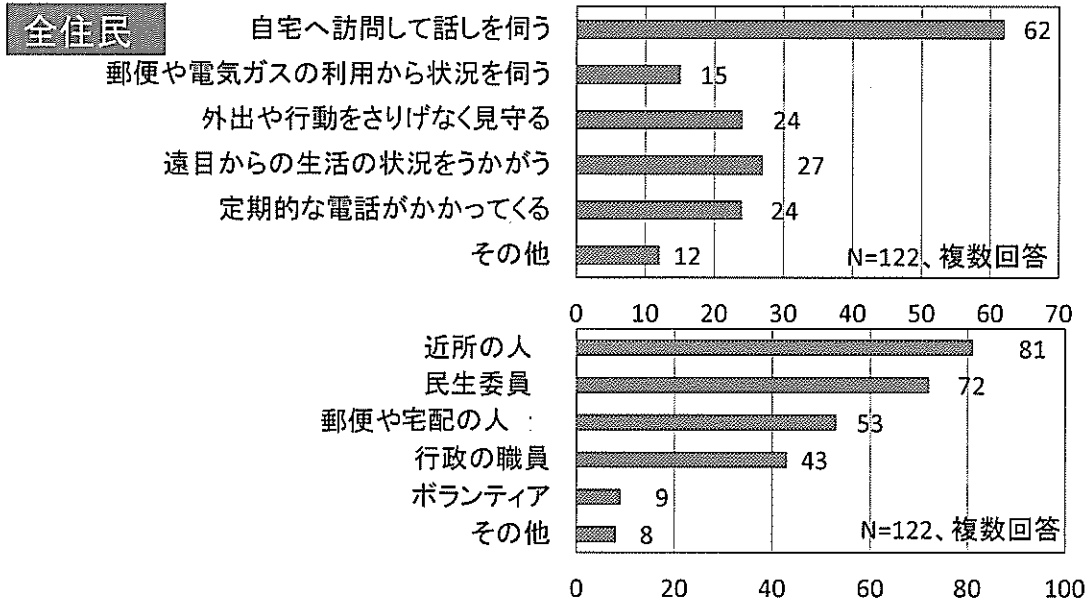
⇒半数近くの人が“話し相手が必要”と答えており、その割合は年齢によってそれほど差はない。

### ・見守りの必要性



⇒半数以上の人“見守りしてほしい”、“将来的に見守りしてほしい”特に 75 歳以上の人は 7 割近くの人がそう答えている。

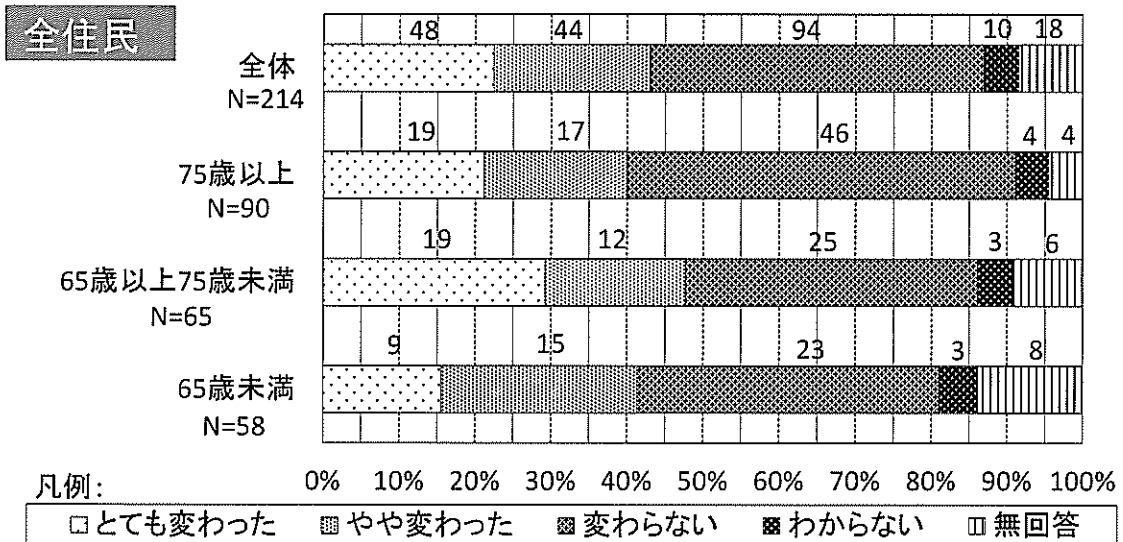
・見守りの程度と見守りしてほしい相手



⇒“自宅への訪問”が一番求められており、見守る人は“近所の人”の他に“郵便の人”と答えた人も多かった。

7. 暮らしの変化と居住の継続

・災害後における暮らしの変化



⇒災害によって4割程度の人が“暮らしが変った”と答えている。



・暮らしの変化についての自由意見

集落に人が少なくなった(11)

地域の人が戻ってこない。  
人口が減少し、生活がし辛くなった。  
住人の人数が減ったので、寂しくなった。(4)  
近所に人が居なくなったので寂しい。通りすがりに話  
すようなことがなくなった。  
集落に人がいなくなった。(2)

気分が変わった(2)

緊張することが多くなった。  
精神的に不安感が増すので、十分な睡眠がとれてい  
ないように思う。

生活環境が変わった(7)

食料の調達について困難を感じる。  
病院受診が不便になった。  
買い物について週2回おかずが届いていたが今は週1回  
牛乳や豆腐などの日頃の買い物ができなくなった。畑が  
できないから、野菜を買わなければならない。  
道も通れないので、友達の人の家にも行けない。行き来  
がない。

人間関係が変わった(6)

人間関係が変わった。頼りにしていた人が居なくなった。  
特に変わらないが、住民が親切になった。(2)  
近所の人との付き合い(関係)が冷たくなった気がする。  
人付き合いが変わった。  
地域の人との人間関係が変わった。

暮らし方が変わった(7)

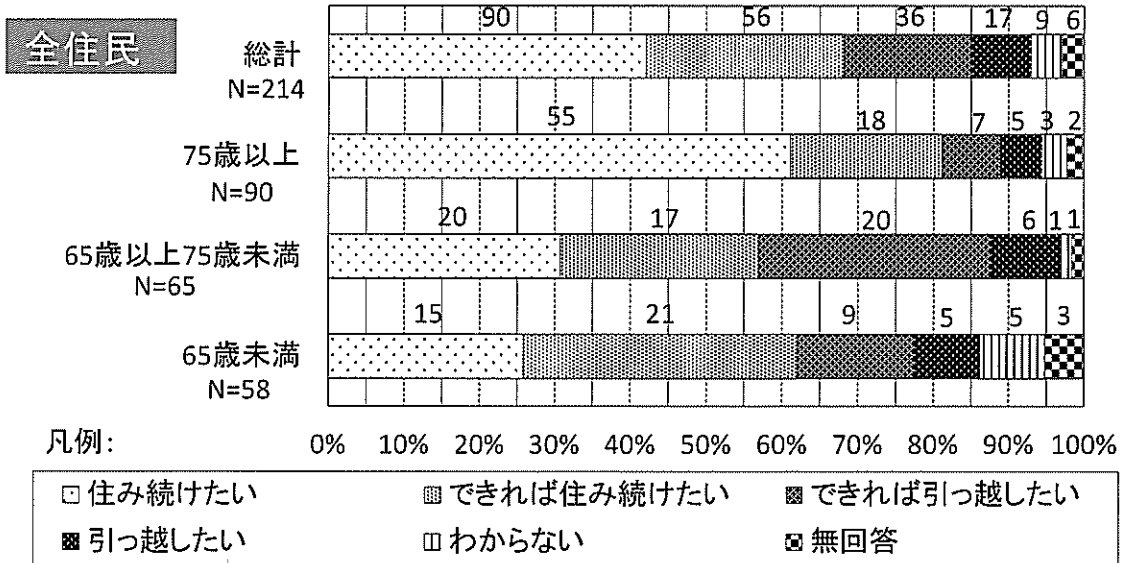
道路事情が変わったため、生活時間が変化した。  
仕事がなく家で暮らす時間が多くなった。  
子供の学校が変わった。(2)  
通勤場所が変わって、生活のリズムが変わった。  
夫の職場がなくなり、収入がなくなった。  
生活パターンが変わった。

道路環境が変わった(5)

復旧復興の為、交通量が増えて騒音が増えた。  
道路事情が悪くなった。  
県道が通行止めの為、林道を迂回するが不便。  
道が不便になった。冬場の交通機関が単に気になる。  
県道と林道のところが気になる。

注)括弧内の数字は意見数。意見は一部抜粋

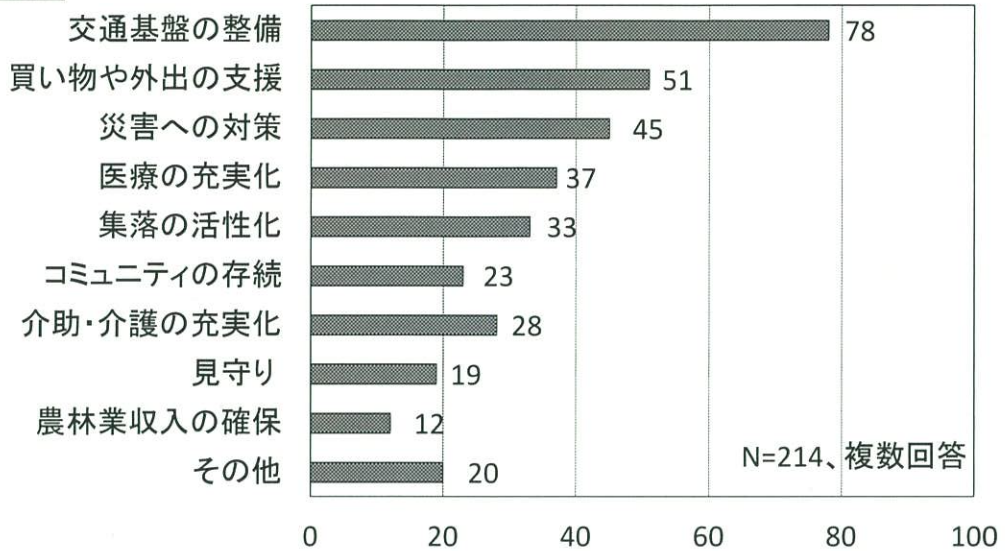
・居住の継続意向



⇒75歳以上だと“住み続けたい”、“できれば住み続けたい”の割合が8割を超えるが、他の年代では6割程度である。

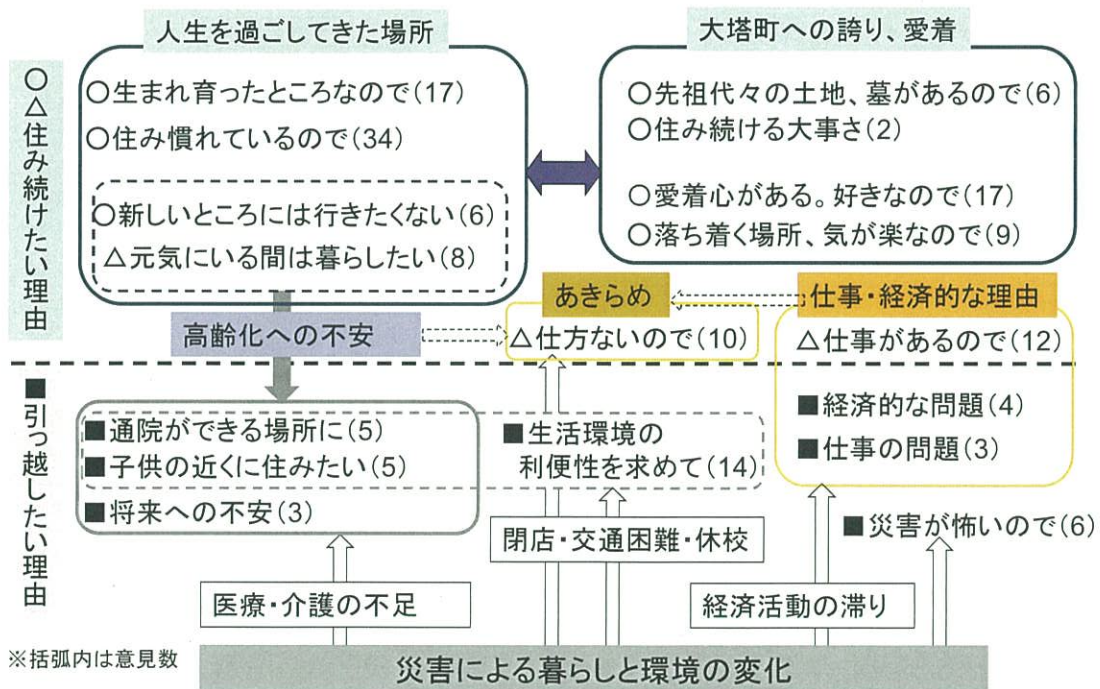
・住み続けるために必要なこと

**全住民**



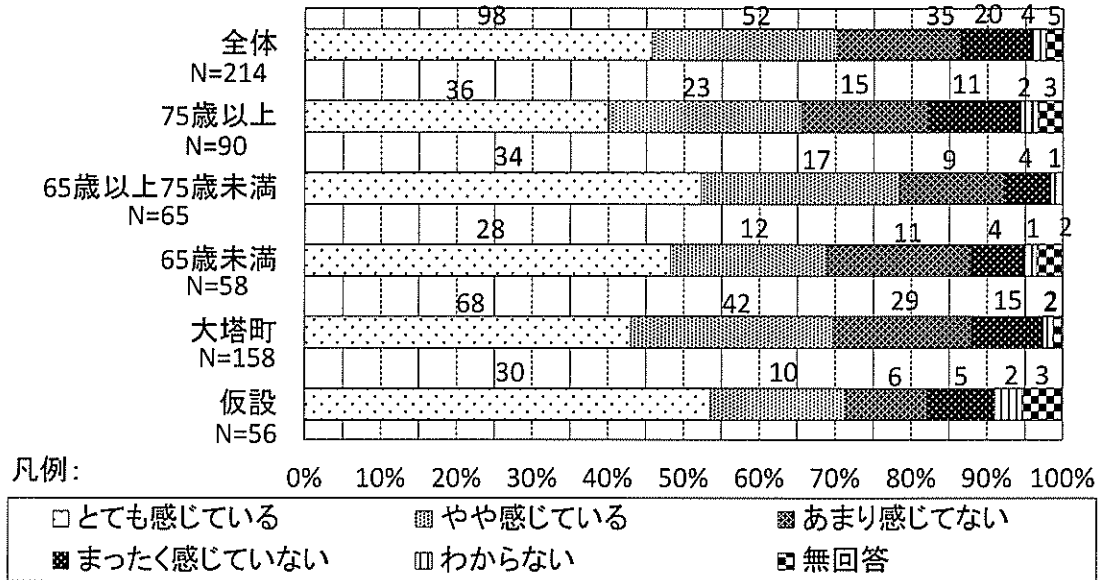
⇒“交通基盤の整備”が1番で、2番目に“買い物や外出の支援”と続く。“見守り”や“コミュニティの存続”は少ない。

・居住継続の理由と暮らしの変化との関係



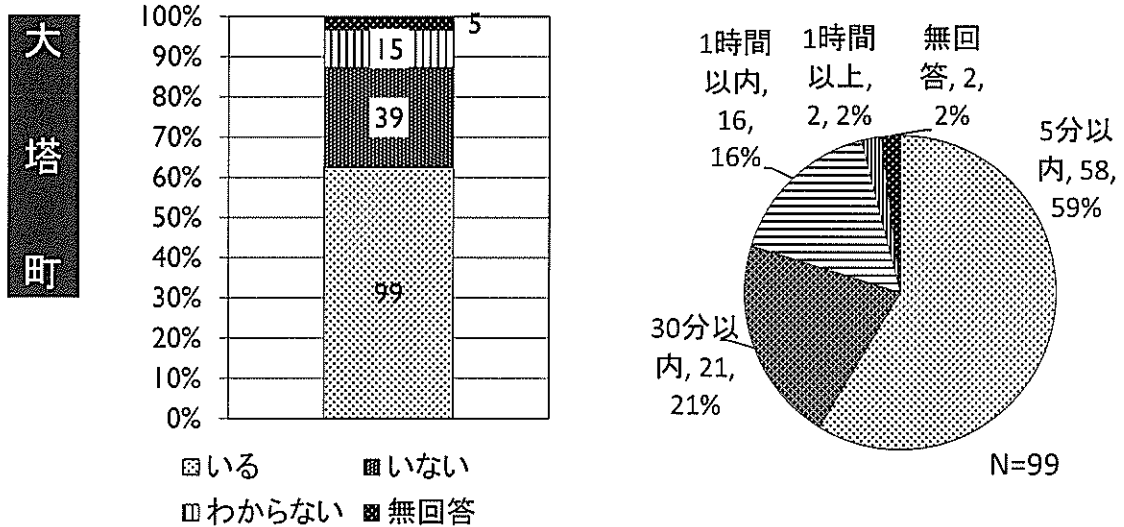
## 8. 災害への不安と緊急対応してくれる人

### ・災害への不安



⇒全体として不安を感じているのが70%以上。年代別にみると、65歳以上75歳未満が一番高いが、75歳以上は65%となっている。また、大塔町と仮設住宅の回答者の差も少ない。

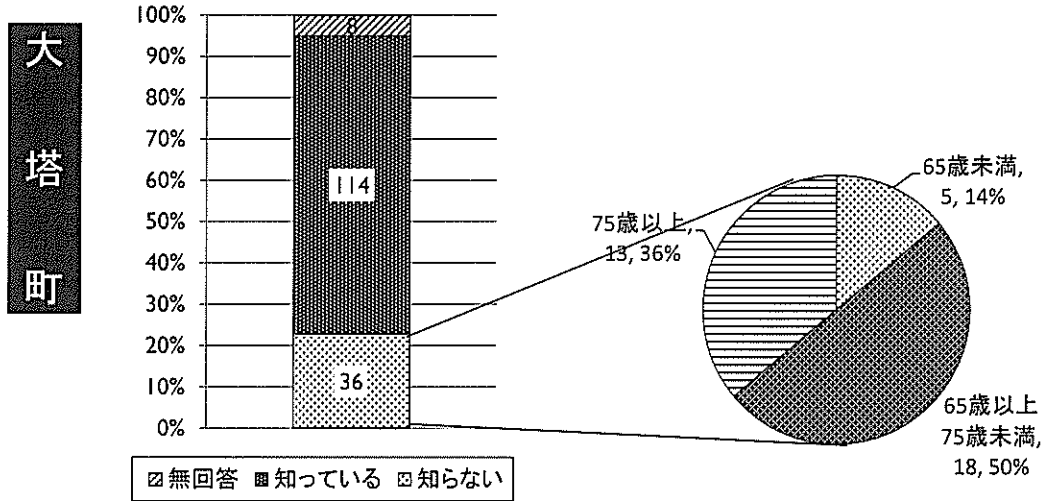
### ・緊急対応してくれる人



⇒75歳以上で“いない”と回答した人の割合は若干高く、65歳未満も“いない”と回答した人の割合が高い。集落別には、小規模な集落で、“いない”人が目立つ。

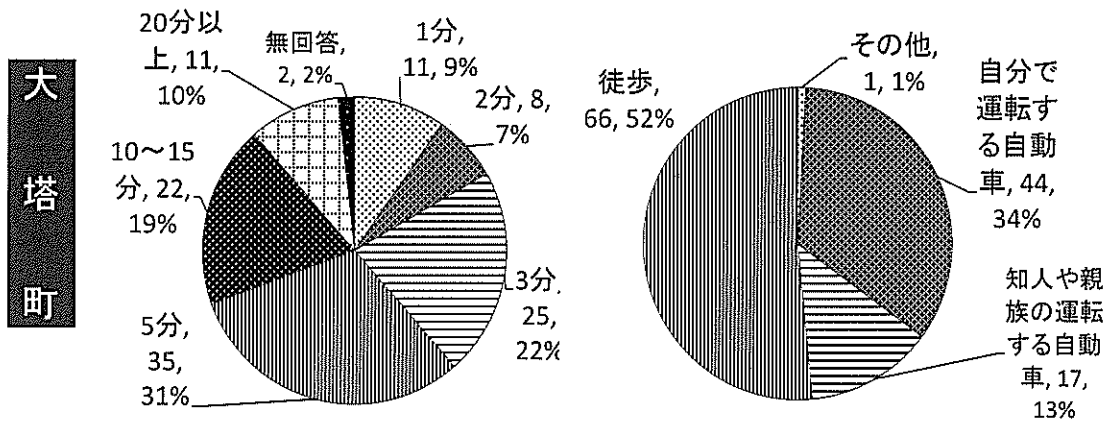
## 9. 災害時の避難

### ・避難場所の認識状況



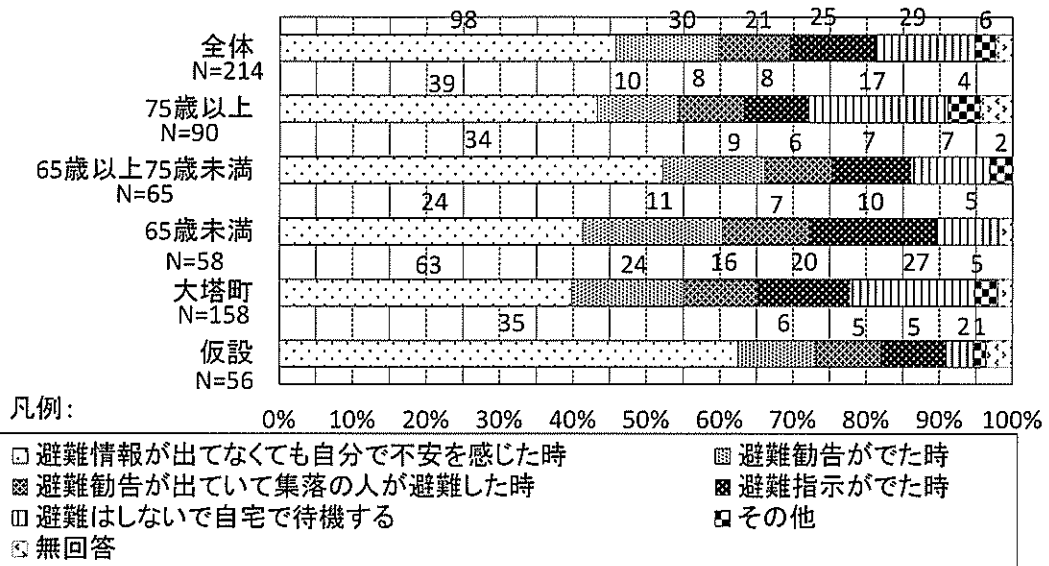
⇒“知らない”人は 36 名で全体の 2 割程度。年齢別には分布の特徴は見られず、集落別に見てもどの集落にも数名はいる。

### ・避難場所への移動時間と移動手段



⇒避難所には三分の二の人が5分以内に到着できる。20分以上かかる人も11名いる(うち2名は自動車で)。手段としては徒歩と自動車が半数ずつ。

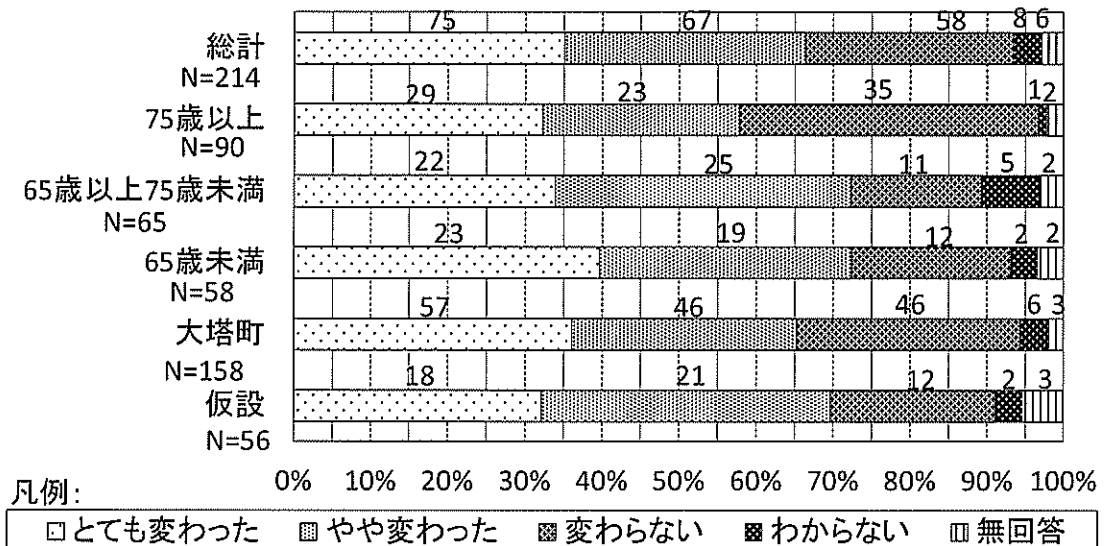
・避難するタイミング



⇒自分で判断して避難するのは、4割以上。避難指示まで含めると8割以上が“避難する”としているが、29名は避難しないで自宅に待機すると回答している。

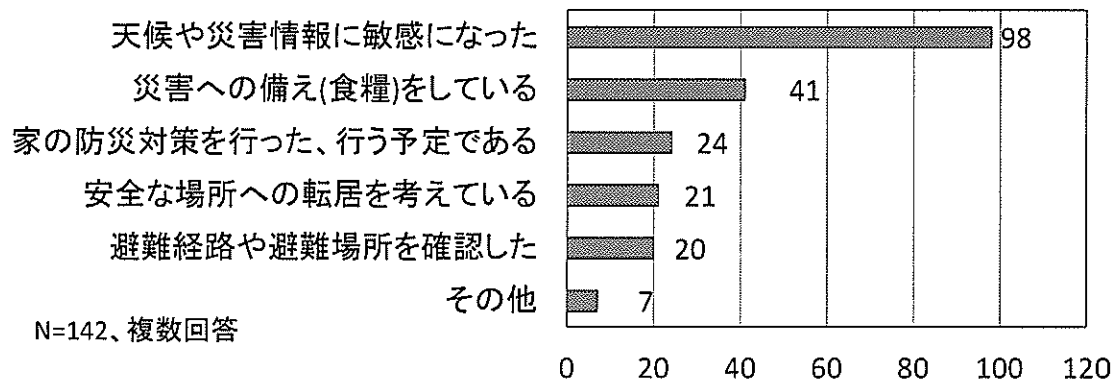
10. 防災に関する意識

・防災意識の変化



⇒防災意識に関しては、三分の二程度の人が“変化した”としており、75歳以上で変化を感じている人の割合が低い。

・防災意識について変化した内容



・防災意識の変化についての自由回答（一部抜粋）

◆天候や災害情報に敏感になった

大雨の時は気にかける/雨に敏感になった/災害以降、ダムの水位を頻繁に見る

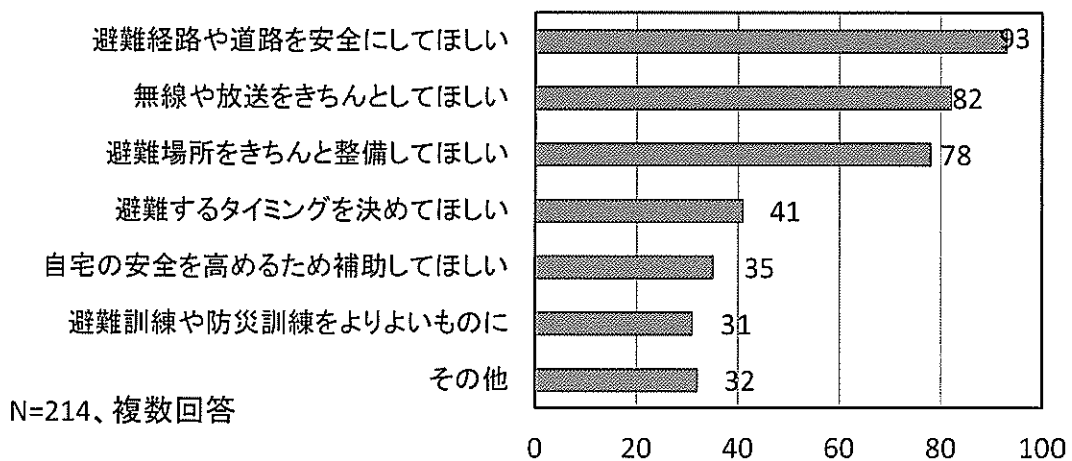
◆災害への備えをしている

非常食の準備をした/防火水の準備をした/防災セット(雨具、ライト、ラジオ)を準備した/蝋燭や電池を近くにいつも置くようになった

◆意識が暮らしが変化した

寝る時もすぐ動ける服装で寝るようになった/将来の自分たちの居場所について考えるようになった

・希望する防災対策



・災害時の課題と希望する防災対策についての自由意見（一部抜粋）

<p><b>避難所の課題</b></p>	<p>お寺の方が安全なのでいつもお寺に避難している。もう少し高台に避難所を移してほしい。集会所が避難所になっているが建物が不安。平らな畑に出るほうが安全。集会所が川のそばで避難できない。寺のほうがいい。避難する場所がない。住民の声をもっと聞いておいてほしかった。避難場所が怖くて子供の所へ避難していた。現在の避難場所は問題あり。変更してほしい。避難場所が危険なのでおかしい。集落の避難場所は集落の中にあり、危険からの避難に適さない。</p>			
<p><b>避難経路の課題</b></p>	<p>道が1本道なので、その被災次第で避難できるかが変わる。車がない人はどうするのか。迂回路がこわい。交通手段がほしい。避難所が近くにあると助かる。避難場所は知っているが、交通手段がないため行けない。</p>	<p><b>危険箇所の整備を</b></p>	<p>河川の整備をしてほしい。外灯の整備してほしい。危険な場所に早く対応してほしい。中途半端な道路工事だったので自宅が危険になった。</p>	
<p><b>防災無線の課題</b></p>		<p>天辻住宅には放送設備がない。無線が確実に通じない時がある。無線が機能していなかった。いざという時の無線が聞こえなかった。停電で電話も何も通じなかった。何か電話以外の連絡方法を考えてほしい。台風時にスピーカーでの情報提供がない。無線が放流音で聞こえない。</p>	<p><b>あきらめ</b></p>	<p>なるようにしかならないと思っている。言うのも仕方がないというあきらめがある。</p>
<p><b>その他の防災対策</b></p>		<p><b>防災時の人のサポート</b></p>		
<p>万が一のために、発電機を地区へ設置してほしい。自治会の災害対策のマニュアルが必要。地区で避難訓練をしていないので、あれば参加する。近くにヘリポートがあれば、小学校にケイタイ電柱を。</p>		<p>防火水槽の確認が困る。高齢なのでできない。雨が強いと水が来ないので汲みに行くのが大変。避難を助ける人が必要。災害時・指示してくれる人が必要。</p>		

11. まとめ

①見守りの支援のありかたについて

“近隣住民、民生委員、郵政や宅配事業者”が見守りをするには抵抗は少なく、程度も“自宅訪問可能”な人が多い。ただ、“さり気ない見守りでよい”との人も見られ、個々のニーズに応じた見守り方法で取り組む必要がある。

②住民の集まる機会づくりについて

住民の多くは、“集落の人が減っている”、“集まる機会が減った”と認識しており、話し相手を求めるニーズは高い。“お茶飲みの会”の実施や、“レクリエーション”への参加意欲は高いが、実際の開催では外部の支援者との連携が不可欠。

③外出の支援、買い物の支援について

高齢の住民が自分で運転する自動車以外で外出するのが困難。生活環境の変化でも町内の店舗の閉鎖が課題となっている。

④災害への不安と防災意識への高まり

災害への不安は総じて高く、被災の大きい集落ほど不安を感じているが、被災していなくとも不安を感じる集落があった。また、防災意識も高い割合で変化しており、集落ごとに差が見られた。

⑤求められる避難所整備と避難経路の確保

避難所への避難について困難を抱えているケースが少なからず見られ、避難所の安全性や距離などの課題が挙げられた。防災対策においても、避難所の整備や経路確保、また無線整備も求められている。

⑥被災時に困難を抱える層への対応

高齢で、緊急対応してくれる人もおらず、避難所も遠いなど、被災時に困難を抱える層もみられ、個別的な対応が必要となる。また、住民によってはあきらめの意識も見られた。